

第30号

有機健康 つうしん

遠赤青汁通信 (H26.12.1発行)

皆様のご協力をいただき、健康・幸せへの想いは広がり続けます。

遠赤青汁株式会社

〒791-0398 愛媛県東温市則之内甲2225-1
TEL フリーダイヤル **0120-148-162**
ホームページ <http://www.enseki.com>

東日本大震災、さらなる復興を願ひ 陽光を植樹しました。

宮城県山元町は、東日本大震災では、津波で甚大な被害を受けた地域の一つです。今回、地元出身の歌手こおり健太様のご尽力により、復興祈願として植樹を行いました。

震災以後、復興祈願の陽光が東北各地にも植樹され、花を咲かせてくれています。今回、こおり様と出合い「平和を願ひ陽光桜を贈り続けている」私共の活動にご賛同いただき、ぜひ山元町の復興のシンボルにお声をかけていただきました。

「震災以来元気がない地元で、何か自分で出来ることはないかと思っていた。



左から高岡、国土交通省副大臣・内閣府副大臣・復興副大臣・衆議院議員 西村明宏様、地元出身歌手こおり健太様により、陽光桜を植樹しました。



記念式典とコンサートが行われ、高岡も夫人と出席させていただきました。コンサートでは、地元山下中学校、坂本中学校吹奏楽部のみなさんにも、すばらしい歌声を聞かせていただきました。

陽光を植樹しました。

「こおり様は亡父高岡正明が人々の幸せ、平和を願って二十五年の歳月をかけて育てました。寒い地域でも暑い地域でも咲くようにと品種改良を重ね、強く美しい花を咲かせます。今回、山元町に陽光を届けることができ、父にも良い報告が出来ます。」

「今後もベトナムやミャンマーにも平和の桜として陽光を届けて参ります。これからの死ねまで、父の想いと共に」

「陽光桜は亡父高岡正明が人々の幸せ、平和を願って二十五年の歳月をかけて育てました。寒い地域でも暑い地域でも咲くようにと品種改良を重ね、強く美しい花を咲かせます。今回、山元町に陽光を届けることができ、父にも良い報告が出来ます。」



高岡もご挨拶。陽光桜と亡父高岡正明の平和への想いを、皆様にご紹介させていただきました。

(代表取締役 高岡照海)

一生の仕事として、力の続く限り、世界へ桜を届けていきたいと思えます。皆様にもお誓いさせていただきます。事前に、地域の様子も見学させていただきました。大きながれきは取り除かれ、直後の様子は感じられないものの、津波が襲った小学校も建物がそのままの住む地域も限定されています。かつての賑わいには程遠い状況でした。

「これまでとは・・・言葉が生まれませんでした。三年半が過ぎてもなお、復興は進んでいません。テレビの報道だけで知る現地の様子はあまりにも情報が少ないものだと痛感しました。広く皆様にお伝えしていかなければならないと想いを新たにいたしました。」

式典の中で、中学生のみなさんの歌声を聞かせていただきました。これからの未来を託す若者の明るさ、元気、笑顔が希望となり、地域を支えているのだと感じました。

満開に咲いた陽光が、皆様の笑顔を運び、より一層の復興の力となることを願っております。

インドネシアでの

「BOPビジネス連携プロジェクト」が承認されました。

JICA (ジャイカ) は、身近なところでは青年海外協力隊など、海外への支援活動を取りまとめている国の機関です。一昨年、インドネシア共和国の南スラウエシ州バンタエン県に陽光桜の植樹を行いました。その際にお会いした県知事のヌルティン・アブドゥラ氏に、弊社の有機野菜由来の青汁製造と製品技術の導入をとの要請に高岡が応える形で、今回のJICA「BOPビジネス連携」へのチャレンジとなりました。

〈バンタエン県の課題〉

産業の未発達への低収入

バンタエン県住民の五割が農業で生計を立てている。市場や農業関連産業が未発達であるため、農業から現金収入がほとんど得られない。

医療サービスを受ける住民の増加

多くの住民は野菜を摂取する習慣がなく、野菜不足が原因の生活習慣病(高血圧や糖尿病等)や皮膚アレルギーなどが顕著である。

これら課題の解決のため、

遠赤青汁株式会社は有機農法による原材料生産、特許加工技術、および販売管理システム等の弊社独自の技術と手法を同県でもBOP層が多い山間部に導入して、持続的な農業(アグリ)ビジネスを構築し、そこで製造される青汁製品により、地域住民の収入増加と栄養改善を含む医療状況の改善に貢献する事業を立ち上げることに致しました。



独立行政法人 国際協力機構

JICAは、日本の政府開発援助 (ODA) を一元的に行う実施機関として、開発途上国への国際協力を行っています。「すべての人々が恩恵を受けるダイナミックな開発」というビジョンを掲げ、多様な援助手法のうち最適な手法を使い、地域別・国別アプローチと課題別アプローチを組み合わせ、開発途上国が抱える課題解決を支援していきます。

※BOPビジネス(BOPは、base of the economic pyramidの略) 低所得層を対象とする国際的な事業活動。民間企業と開発援助機関が連携し、収益を確保しながら、貧困層の生活向上など社会的課題の解決に向けて貢献する

農地再生に

挑む

今年も、高校生のみなさんと養護施設の方にお手伝いをいただき、にんにくの種の植え付けをしました。前回収穫したにんにくを取り置き、次の栽培のための種にします。一片ずつの種から、また八片のにんにくが収穫できます。

当初の予定日にちょうど台風がやってきて急ぎよ中止。高校側には二度目の再募集を行って、参加していただきました。先生が、「にんにく植え付け体験募集♪」のチラシを作ってください、生徒さんと呼びかけていただきました。今年でもう三年目。一年生の時から参加しているという三年生もいました。なかなか、土に触れて農業を考える機会もないので、大きな畑に来て



体操服の高校生と、施設の方がグループになって、にんにくを植え付けていきます。

「農地再生に挑む」では、放置された農場を再生し、有機圃場として生まれ変わる様子をシリーズとしてお伝えしています。

行う作業は珍しく、楽しいそうです。仕切り直しをして開催した植え付け作業は、天候にも恵まれ、暑いぐらいの日差しの中に行われました。

マルチと呼ばれる黒いシートを農場全体に張っています。マルチには既に穴があけられています。ケールは土の中で根が広がり、葉も大きく伸びていきます。マルチにあけられた間隔も広くとりまします。にんにくは、それ自体土の中で下に下に伸びていきます。玉が付きますが、横に広がらないので、マルチの穴も小さく、詰まっています。横には4つずつ並んで穴が空いています。植えるときに大事なものは、にんにくの向きです。根が下につくように真っ直ぐに種を差し込んでいきます。この向きが横になったり、反対向きになったりすると、芽が真っ直ぐに伸びず商品として形が悪くなり、美しい姿の



にんにくの種として、割った一片を穴に落として土でふたをしていきます。にんにくを配る人、入れる人と分担して作業していきます。



穴に上下を合わせて種を入れていきます。丈夫に育ってほしいですね。

にんにくが育ちません。収穫する時の美しい姿を想像して、一個一個丁寧に植えることが大事です。大事な事、意識して行う事をポイントに挙げて説明しました。

作業分担も、各自で考えてもらいました。穴をあけていく人、植えるにんにくを配る人、ひたすら植える人。マルチは長いもので一〇〇メートルもあります。種を並べることに一生懸命になると、にんにくがずらつと長く列になって、植えるのがおいつかない様子です。全体を見て、ペースを合わせながら作業は進めないといけませんね。皆さんの協力で八十キロのにんにくが植えられました。これから大事に育てていきたいと思えます。また、成長を見に来てくださいな。



穴あけボーイズ登場。にんにくを植えるための穴を、器具を使ってあけていきます。斜めにささないように注意注意。もくもくと穴をあけ続けてくれました。

木下さんの

有機の話 新しい研修生がやってきた。

笑顔の二人。(右がハーさん、左がファンさん) これから3年間、がんばります。



十月に入り、農場には新しいメンバーがやって来ました。ベトナムからの研修生で、これから三年間弊社農場で研修します。事前に愛媛県入りして、日本の作法や日常の決まり事などを、約一カ月かけて学んできました。礼儀もきちんとしています。

「よろしくお願いします」最初に会社に入ってきた時に、ひときわ大きな声であいさつしたのが、ハーさん。彼女はとても流暢な日本語を話します。一生懸命に日本語を勉強してきたそうです。

もうひとりがファンさん。(ちよっと名前が似てる)彼女のあいさつは、「ベトナムから来ました、ファンです。二十二歳です。よろしくお願ひします」でした。え？二十二歳？

そうなんです。彼女たちは二十歳そこそこで、自国を離れ遠く日本まで三年間も勉強のために来ているのです。親元を離れたこともない私には、想像もつきません。その勇気に感心します。偉いなあ。

農業の研修生として日本に来る人たちも増えました。日本の若者が農業離れなもの、ひとつの要因です。弊社農場で働く海外出身者も、彼女たちを加え、五名になりました。農場も国際化だ...

写真を撮る時も、「にんにく持つ？これいい？」と楽しそう。これから、寒くなるけど頑張ってくださいね。



にんにくの植え付け作業を行っています。周りを見渡すと、6人中5人が海外出身者(ベトナム4名、ネパール1名)濃い〜いメンバーにビックリです。



1個1個、にんにくをつまんで穴に入れて植えていきます。まだまだ手つきが怪しいですが、次第に慣れてくることでしょう。ファンさんは背が高いので、ちょっと座った作業が大変そうでした。

EVENT

初めての海外出張販売

香港崇光に行ってきました！

二〇一四年六月十一日～六月二十四日

私は普段、工場で製造業務に携わっていますが、百貨店にも販売の応援に行くこともあり、経験は積んでいるつもりでした。しかし、今回は久しぶりの販売で、しかも海外。かなり緊張するスタートでした。

英語も得意ではない上に、私の担当は青汁ではなく「ケール入りのふりかけ」。現地で炊飯器を購入し、毎朝の出勤時にお米と水を購入しました。炊きたてのご飯を用意して、ふりかけの実演販売。慣れない、戸惑うことだらけでしたが、現地のマネキンさんの協力もあり、二週間の販売を乗り切ることができました。毎日、ひとつずつ現地の言葉を覚えていきました。「御試食どうぞ。」

普段、暮らしている日本では感じることが出来ない雰囲気、人々の熱気、空気感……。香港での販売は、全てが良い刺激となりました。

今回の経験を糧に、次回の海外販売に活かせる様なりサーチもしつつ、色々な方向から物を見ることで、目を養いたいと思います。

（製造部 藤田良子）

が「シーハー」。「梅味ですよ。」が「ムイチーメイ」。

「ようし、いける」。販売や通勤にも慣れてきたなと思う頃には、物産展も終了。当初、私が想像した以上に、青汁はもちろん四国の物産は人気でした。息つく暇もない怒濤の二週間が終わり、帰国の途につきました。

普段、暮らしている日本では感じることが出来ない雰囲気、人々の熱気、空気感……。香港での販売は、全てが良い刺激となりました。

今回の経験を糧に、次回の海外販売に活かせる様なりサーチもしつつ、色々な方向から物を見ることで、目を養いたいと思います。

（製造部 藤田良子）



青汁の原料、緑黄色野菜ケールを使ったふりかけ。ケールの葉を乾燥して、チップの状態に混ぜています。



試食をどうするか、日本で研究して現地のマネキンさんにも指導しました。ご飯に、ふりかけをかけて試食していただきます。



毎日の催事販売のため、お米や水を買出しする高岡。社長自らお買い物です。日本ではあまり見ない光景なので新鮮です（笑）



四国八十八箇所 一番札所

竺和山 一乗院 靈山院 (りょうぜんじ)

徳島県鳴門市大麻町板東126

奈良時代に僧・行基によって開かれ、その後、八十八ヶ所の霊場を開くことを決意した弘法大師によってその起点の霊場に位置付けられました。この寺の空に輝く仏を感じた大師は、釈迦如来がインドの鷲峰山（しゅうほうざん）で説法している姿をイメージ。天竺の靈山を日本に移すという意味で竺和山・靈山寺と名づけたそうです。



境内に入ると池の端に釈迦如来像が、足元の水面には蓮の葉に乗って如来を拝む幼児の像が数体。



境内には遍路装束に身を固めたマネキンの姿もあり、発願の札所にふさわしい雰囲気を感じることができます。

再生エネルギーと、地域再生事業のコラボで地域を元気に！



遠赤青汁では、以前より地域を元気にしようと、耕作放棄地を農場に戻す「地域再生事業」に取り組んで参りました。

今、電力は原子力から、再生エネルギーへと主力を移そうとしています。弊社でも、太陽光発電の可能性と、有効な土地利用が出来ないか検討を始めました。

太陽光発電は、家の屋根につけたり、メガソーラーと呼ばれる巨大な発電所まで、様々な取り組みが全国で行われています。これは国が発電した電力を買い取る仕組みを提案したことに端を発しています。

耕作放棄地の中には、車両や、農機具の乗り入れが難しいなどの理由でどうしても農場に替えられないものがあり、開墾するだけが有効な利用とは言えない土地も増えています。すべての土地が再生できる訳ではない。「地域再生事業」においても課題となっていました。

太陽光発電は、パネルの設置で山の斜面でも設置が可能です。新たな耕作放棄地の活用方法の一つとして取り組みが始まりました。

近年、支柱を立てて営業を継続するタイプの太陽光発電設備等が新たに技術開発されて実用段階となっています。本来農地を宅地等に利用する場合は、農地転用許可申請が必要でした。しかしながら、農林水産省は平成二十五年四月に「支柱を立てて営業を継続する太陽光発電設備等についての農地転用許可制度上の取り扱いについて」

の中で、支柱の基礎部分については一時転用許可の対象とする旨が認められています。

耕作放棄地を開墾して農地に戻し、さらにその上の空間を太陽光発電で利用する。農業と再生エネルギーの共存です。今年から太陽光発電事業をスタートしました。

十分な発電量が確保できなければ設備を行っても無駄になります。狭い土地でどのくらいの発電が起こせるのか、様々な地域や環境を想定し、実験的にパネルの設置も始めています。

地元である東温市は積極的に「新エネルギー」への取り組みを進めています。弊社も二〇一〇年から国内クレジットの活用など、協力を行ってきました。使う側から作る側に、立場が代わっても、協力を

続けたいと思います。

耕作放棄地が増える背景として、高齢化があります。丹原地区の特産とされていた柿栽培も、危険な高所での作業や、上を向いての収穫などが難しくなっています。

さらに、農業収入だけでは生活が厳しく、子供には農業を継がせたくないと考える農家さんは、離農を選択します。

「このままではいかん」と立ち上がった高岡。太陽光発電で安定的な収入が確保できれば、後継者育成、新規就農者も増やせ、地域の農業復興にも繋がるのではないかと考えました。

太陽光発電と農業のコラボで、農地の可能性が広がり、新しい農業の形が始まっています。魅力ある農業作りに向けて、今後も挑戦していきたいと思っています。



弊社社員寮の敷地にも、太陽光発電設備を設置して発電量など調査しています。

農場のＩＴ化推進

農業にもビッグデータを活用する動きが出てきました。いわゆる気象データと、農業の計画を合わせて効率的な生産を図ろうとしています。

弊社は、従来より有機ＪＡＳ認定の更新申請や、新しく農地を開墾して新規で申請を行ってきました。申請には、農地にどのような作業を行ったか、どのような生産物が取れたのか等、記録を報告するものがあります。こうした記録は、有機ＪＡＳ法が出来た当初からデータ化し、パソコンで管理されてきました。

今でこそ、スマートフォンやタブレットなどが容易なツールがありますが、始めた当初はパソコンさえ扱える人が少ない状況でした。また、農場作業者は身体を使うのは平気ですが、パソコンに触りたくないという人もいます。こうした事務作業が、数少ない入力者に負担をかけていました。



作業の記録をつける越智。どこの圃場で、誰が何をしている等入力し、パソコンで集計します。

その場で入力し、データは事務所のPCでリアルタイムに確認できる。こんな時代が来たんですね。ありがたいことです。

早速、防水・防塵タイプのタブレットを購入し、入力をスタートしました。最初は、どのタイミングで行ったらいいのか、迷っていたようですが一カ月もすると、圃場ごとの作業が農場から離れた事務所しながら確認が出来るようになりました。

農場には、ネパール出身者のほかベトナムから研修生が来ています。漢字は読めなくても音声認識を使って、簡単に入力を行えるツールは、彼らの仕事の幅を広げてくれます。

今後も、ＩＴを上手に活用して誰でも便利に楽しく、記録がつけられるように広めていきたいと思っています。農業もＩＴも使い方次第で世界が広がります。



農業アプリ「畑らく日記」無料ダウンロードが出来ます。

